絶滅への悪循環からの脱却

絶滅を防ごうと活動しても、守ろうとしている種はどんどん衰退していく……。悩みを抱えているグループも多いと思います。絶滅抑止を進めるために、実現したい課題が3つあります。

1 絶滅危惧情報・生活史の情報を集め、確実に世代交代を維持する。

2 絶滅危惧となった衰退要因を突き止め、要因を着実に取り除く。

3 対策の確実な実行のため、地域のさまざまな立場や関係者の合意を取る。

絶滅への悪循環を断ち切るため、この3つの課題を克服しながら進む活動をご紹介します。

写真1 長野県飯田市のハナノキの紅葉。ハナノキは春の花、翼果、秋の紅葉も真っ赤になるカエデの一種で、50年、100年とかけて樹高30m、胸高周囲3mもの大木になる。絶滅危惧Ⅱ類。

1 絶滅危惧情報・生活史の情報を集め、確実に世代交代を維持する。

●長野県南部 ハナノキの保護

佐伯いく代（首都大学東京 牧野標本館・日本学術振興会特別研究員）

自生地の状況を把握し、繁殖と更新の場を守り続ける

ハナノキは日本固有の落葉高木で、本州中部地方の限られた湿地にのみ分布する絶滅危惧植物です。「花の木」という名は、春に深紅の花や翼果をつけ、秋には鮮やかに紅葉する卓越した美しさに由来します。本種は第三紀の地層から化石が産出される起源の古い植物で、気候変動によって分布が縮小する中、日本では中部地方の低湿地群に遺存的に残ってきました。近年、湿地の開発などで個体数は激減し、開花サイズに至るものは1500未満と推定されています。このハナノキを絶滅から守るために精力的に活動を行ってきたのが「はなのき友の会」です。

はなのき友の会の活動は非常に地道です。特に当初は、北沢あさ子代表を中心に会員が山に分け入って自生地を探し、個体のサイズや開花状況についてデータを集めるというものでした。それに基づき、地主や行政の方に保護のお願いにあがります。これは、時間も手間もかかるプロセスでしたが、生育地が小規模で、ほとんどが個人地主によって所有されるハナノキのような種にとって、まさに生命線ともいえる重要な活動でした。特に湿地開発への反対運動のときには、調査で得られたデータの存在が、会の主張を強くサポートしていたと思います。

またハナノキは、各個体が雄木か雌木のどちらかに分かれる雌雄異株植物です。つまり、両方の性がバランスよく生育していなければ、世代交代をすることができません。さらに実生が定着できる場所は光条件のよい湿地に限られています。そのため会では、①個体ごとに雌雄を必ず記録し、実生の生育状況を観察する、②実生が定着しそうな場所ではツル伐や竹やぶ払いをし、世代交代を促進するという活動を行っています。

図1:ハナノキの生育地分布図

湿地全体の調査結果を会員～地域で情報共有

会の発足以来、保護に協力してくださる方の数は着実に増え、モニタリング調査も始まりました。これまでの活動は、今、大きな花を咲かせようとしています。活動が成功している大きな要因は、やはりハナノキ湿地に対する理解の深さと豊富な調査経験であると思います。会としては、地主の方に経済的なメリットのない「善意」の保全をお願いするわけですから、その意義についてきちんと説明できなければいけません。その点、会員の方はハナノキの学術的重要性や自生地の自然そのものについて、実に多くの知識をお持ちです。

さらに、年に数回発行される「はなのき通信」ではさまざまなトピックが紹介され、これが会員同士の情報交換に一役買っています。調査の体験談や観察された動植物のことなどが生き生きとした文章で綴られているので、毎号、読むのが楽しみです。ほかにも、メーリングリストや報告書、パンフレットなどを通じて活動の成果が発信されています。これは会員だけでなく、地域の方とのコミュニケーションに利用されています。

写真5：ハナノキ雌花（左）と雄花（右）

写真4：ハナノキは初夏、種が入っている何万もの翼果（しか）を飛ばす。

写真2：絶滅危惧種のミカワバイケイソウとハナノキ。ハナノキ湿地には、東海丘陵要素と呼ばれる特殊な湿性植物が生育し、希少種の宝庫となっている。

写真3：絶滅危惧種のカザグルマ。

◀会が2003年にまとめた「長野県における自生のハナノキ毎木調査報告」。1991年から各自生地において1本1本の木に番号をつけ、雌雄や胸高直径、生育位置を詳細に記録し続けている。雄木と雌木の割合から世代交代が阻害されていない個体群かどうかも監視できている。

調査活動を支える多彩な文化的活動

このように書くと、何だかとても硬派な会のように聞こえますが、実際の活動はいたって明るいものです。会員には、さまざまな特技を持った方がいて、草木染、絵画・写真展、ハナノキクッキーづくり、そば打ち、お餅つき、調査後の食事会など、楽しいイベントが続いています。また、先立ってできた伊那谷自然友の会や、地元博物館学芸員・地質・チョウ、鳥などの専門家の方が、いろいろな形で活動に貢献してくださっています。多様なバックグラウンドを持つ人々の存在が、会の刺激となっているのは間違いありません。

ハナノキを守りながら特異な生態系全体を守る

最後に、私がこの会について最も好きな点は、ハナノキの保全を謳いながらも、決してハナノキだけを守ろうとしてはいないことです。ハナノキが生育する低湿地は、百万年を超えるオーダーで中部地方に存在し続けてきました。それがさまざまな固有種を呼び込み、特異な自然生態系として残ってきたわけです。湿地には、ハナノキ以外にも多くの希少植物が生育しています。はなのき友の会はこういった在来種の多様性にも配慮しており、例えば、ハナノキのためにほかの種を大規模に除去するようなことは行いません。ハナノキに注目しながらも湿地をトータルに保護しようという、絶妙なバランス感覚を持って活動に取り組まれています。このような姿勢から私たち研究者も学ぶべき点は多く、今後のさらなる発展を期待します。

「はなのき友の会」

1990年飯田市山本に計画されたゴルフ場建設反対運動を機に、この地域がハナノキという希少な植物を含む、数百～千万年前からの遺存的環境であることが知られ始めた。計画に反対する地主や有志が集まり、保全活動が始まる。1993年、北沢あさ子さんが呼びかけ人となり、「はなのき友の会」を設立。ハナノキの戸籍調査、植生調査、竹やぶ払い、ゴミ拾い、観察会、ハナノキ染めなどの活動を開始。その後も道路、ゴミ処分場などの開発計画からハナノキ湿地を守るため、科学的調査に基づく保護活動を展開。2007年からモニタリング1000里地調査コアサイト。（写真：北沢あさ子）

写真1, 2：佐伯いく代　写真3, 4, 5：北沢あさ子